随　想

創立60周年を迎えて

三　島　徳　七*

日本鉄鋼協会は，本年をもつてめでたく創立 60 周年を迎えましたが，国内はもとより海外諸国からも権威ある学術団体としての地位を確立したと高く評価されておりますことはご同慶のいたりであります．

10 年前の輝やかしい創立 50 周年記念事業は，もとより本会の隆盛を象徴するものでありましたが，さらに本年は学会活動に大幅な伸長が期待されていることは誠に力強く感ずる次第であります．

最近の 10 年間におけるわが国鉄鋼の学問と技術に関する進歩発展は，将来に向けての展望とともに，本会誌「創立 60 周年記念特集号—鉄鋼技術の進歩—」に集大成されておりますが，さきの「創立 50 周年記念特集号」をひもとくまでもなく，この 10 年間には誠に驚異的な飛躍のあつたことを伺い知ることができます．これは，昭和 30 年代から 40 年代後半にかけて，わが国の産業構造の高度化が急激に進展した事実を背景に，本会の役員ならびに会員諸氏のたゆまざる精進努力に負うところ極めて多大であると存じます．

しかしながら，近年わが国の産業構造には難かしい課題が山積しておりますし，その中で昭和 50 年代の鉄鋼界には資源，エネルギー，環境問題など長期にわたる的確な対策を迫る幾多の難問題が控えております．そしてこれら諸問題の解決には技術革新への期待と責任がますます重く，知識集約化，省資源化の方向へ独創的な発想をもつて臨まねばなりますまい．

このような時こそ，本会は半世紀以上にわたる輝やかしい伝統の上に立つて，改めて学会活動のあるべき姿を熟慮して有効適切な計画を断行する必要があろうかと考えます．

本会はすでに共同研究会，鉄鋼基礎共同研究会をはじめ各種の委員会活動，さらに国際的な学術交流などを通じ，広く鉄鋼の学問と技術の向上進歩に貢献しておりますが，今後は電気，計測，機械，化学，衛生工学など関連諸分野との協調に基づく広範な活動が要求されてくるものと思います．

本会の活動，刊行物は質量ともに最近確かに充実して参りました．特に欧文誌は鉄鋼生産技術に関する学術，技術論文が外人の注目をひき，国際誌としての評価が高まつており，今年から月刊誌として発行されることは，誠に時宜を得たもので喜ばしい限りであります．

私は今こそ国内会員数はいうまでもなく，いかにして外人会員数を増やしてゆくか真剣に考える時機であり，このことは本会運営の基本にかかわる重要課題であろうかと存じます．

さて，最近科学技術の功罪に対していろいろの論議が行なわれ，公害の恐ろしさから科学技術を“悪”としてその発展を押えようとする声さえもありました．

しかし，私は科学技術こそが人類社会の発展を推進する原動力であると信じております．産業革命この方 200 年におよぶ人類の文明は，科学に基礎をおく技術によつて進展し，地球から貧困を追い払い，豊かな社会をつくりあげました．

また戦後の荒廃から自由世界第 2 位の経済大国といわれるようになり，豊かな社会を建設したわが国の驚異的な経済成長も，その推進の主力は新技術であつたと思います．

* 本会名誉会員，前会長　東京大学名誉教授　工博

現にそのあまりにも急速な進歩のサイド・エフエクトのために公害，大気汚染，環境破壊など反省を求められる部面がでてきたとはいえ，新しい製造方法，設備施設，経営組織など，いづれも科学革新の波にのつて推進されたことはまぎれもない事実であります．

現代社会においても，技術は新製品を創出，製品のコストダウンなどを通じて，新しい価値を生み出し，それによつて高い賃金を支払い，より安い製品を供給し，資本に対する利潤を確保することを可能ならしめています．

このため，科学技術の重要性は広く一般に認められ，新技術開発競争の激化は世界的趨勢になつたのであります．

最近技術進歩の様相は急速に変化しつつあり，そのうえ技術は専門化から総合化，大型化の方向に発展し，研究から生産に至る開発期間は著しく短縮され，さらにあらゆる分野にわたつて多種多様の新技術が開発されています．

そして高度に発展した国では，より多くの産業が行き届いた技術に基礎を求めようとしており，技術集約的産業が決定的役割を演じつつあります．公共部門においても産業と同様に，技術に基礎をおく革新に迫られております．運輸，通信，医療，などの巨大なシステムはその典型的な例であるといえます．

このように，今や科学技術の進歩は，社会，人類生活のあらゆる分野に大きく影響し，変化とシステム化を特徴とする社会変革の原動力となつています．

人間環境の汚染と公害が現状のまま進めば，生物もついには絶滅する事態にもなりかねないとして，現在の経済成長を一時ストップさせても，公害をすべて追放すべしと主張する声さえ聞こえてきました．

しかし，これらの考えは無理であり誤りであると思います．科学技術は確かにいろいろな害を生じているが，それより多くの恩恵を人類に与えてきたことは事実であります．したがつて科学技術の発展に伴つて生ずる害は，科学技術によつて抑制し，解決していくべきだと私は思います．

今日の社会において，科学技術者の果たすべき役割はまことに大きく，その活動は社会発展の原動力であることは前にも述べたとおりであります．テククロジー・アセスメントにおいても，技術の開発と応用のにない手であり，またそのことによつて，技術の良き理解者である技術者こそが中心となつてその推進にあたるべきであろうと考えます．

最後に会員各位に対して一言私の希望を申し添えたいと思います．

今後の科学者や技術者は今までのように，狭い自己の専門分野の殻の中にとどまつていることを許されません．幅広い知識と経験を身につけ，専門の異なる多くの人々と交友を保ちつつ，自己の切磋琢磨にいそしみ，社会の期待に応えるよう努力すべきであろうと考えます．

以上，本会創立60周年を迎えるにあたり，衷心よりおよろこび申しあげるとともに所感の一端を述べて責めをふさぐことにしました．